

タイトル：2021年度 教育セミナー（第17回）

日時：2021年9月16日（木）～19日（日）

オンライン開催

「臣従の宣誓から帝国の貴族へ：カザフのハンたちと周縁国家との関係から」

野田仁（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

本報告では、ロシア・カザフ間の外交関係を念頭に、外交文書から何を読み取ることができなのか、その可能性を議論し、他者との関係を構築する際の翻訳・通訳の問題に焦点を当てながら、カザフ遊牧民の18世紀から20世紀初頭の歴史を振り返った。

先行して翻訳の問題について述べると、現在報告者も関与して進行中のプロジェクト「イスラーム信頼学」の課題に照らして、翻訳・通訳に見る他者との関係構築の要素を考察することが主題としてあった。そこから勢力間の関係構築の際の外交文書における翻訳に目を向けることを前提とする。注目すべきは1730年にカザフのアブルハイル・ハンがロシア皇帝アンナに宛てた文書であり、そのテュルク語原文、当時の通訳官によるロシア語訳、ソ連期の研究者による翻訳の間の違いを検討し、ロシアとカザフのそれぞれの立場で両者の関係をどうとらえていたのか、またその後の交渉の過程を通じて、両者の関係がどのように固定化されていったのかが明らかになる。

さらに、カザフとロシア以外の地域・勢力との外交関係に透けて見えるロシア・カザフ関係をも踏まえながら、かつカザフ側の視点を探るべくテュルク語文書の言葉遣いに注目して再検討した。これらの作業により、翻訳、すなわち言語の変換によって、カザフとロシアの間の関係性・上下関係がヴァナキュラーなものとして固定化され、アラビア語・ペルシャ語の語彙を含む文言から価値の転換が行われる状況を例示することができた。

その後19世紀におけるエリート層の貴族化のなかで、ロシア帝国に包摂されたカザフ人にとっては、ロシア帝国との関係性は集団と国家の関係に昇華していったわけだが、東側でカザフ人が関係を結んだ中国（清および中華民国初期）においては王公に代表される属人的関係が強く意識され、下位の集団については放任されていた状況と対照的であったことを確認した。